奈良・平城宮・京跡

1 所在地　奈良市佐紀町・北新町・横領町・法華寺町、大和郡山市九条町・観音寺町

2 調査期間　平城宮南面東門地区　一九八〇年（昭55）三月～七月、右京三条一坊三条大路　一九八〇年四月、法華寺西南部　一九八〇年四月～五月、平城京西市跡（第一次）一九八〇年一一月～一二月、左京二条二坊坊間大路　一九八〇年一二月、九条大路一九八〇年一一月～一九八一年一月

3 発掘機関　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者　岡田英男

5 遺跡の種類　宮殿・官衙跡、都城跡、寺院跡

6 遺跡の年代　奈良時代～平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

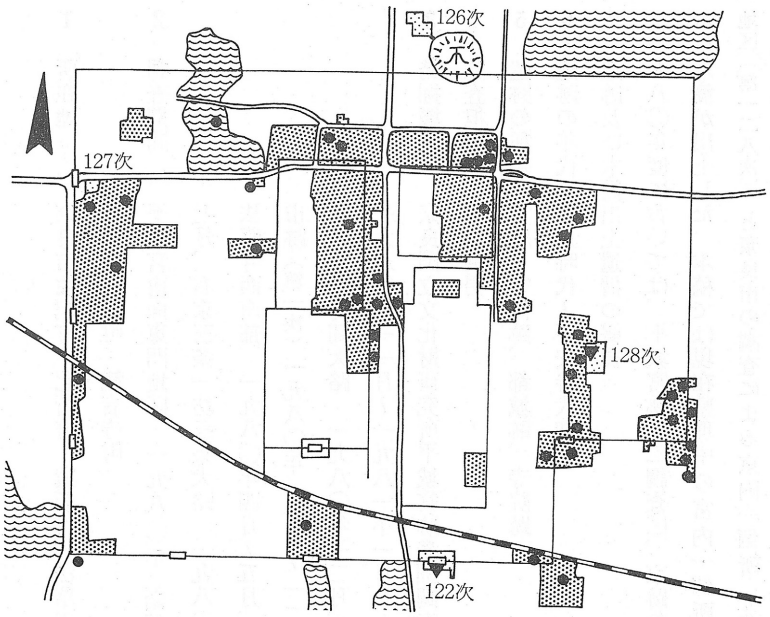
一九八〇年度においては、平城宮跡の二調査区、京跡の六調査地から木簡が出土した。本稿では現在整理中の宮内一個所（東院西辺地区〔第一二八次〕）と奈良市の調査による京内一個所（本誌一四頁参照）の二個所を除いた遺跡をとりあげる。

一　平城宮南面東門（壬生門）（第一二三次）

平城宮第一二三次調査は、平城宮の南面東門（壬生門）跡を対象とし、門の基壇・南面大垣および二条大路などを一体として明らかにした。

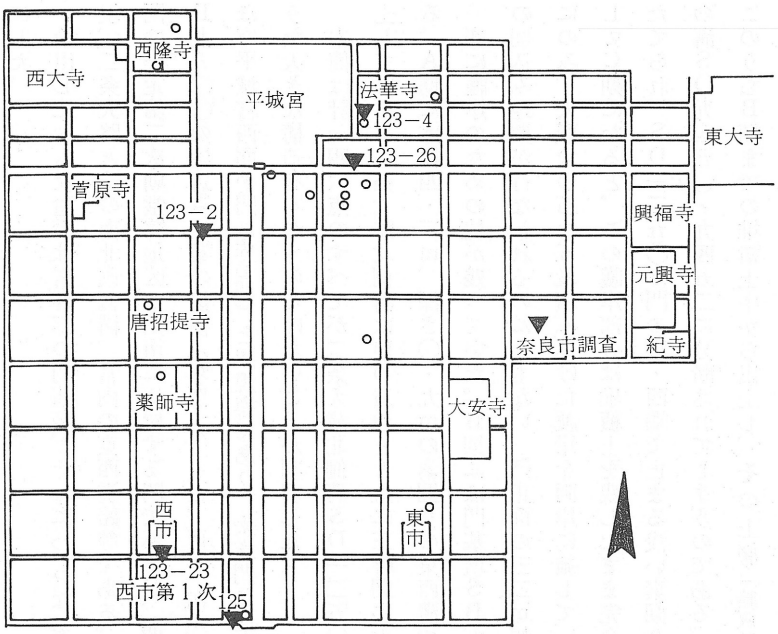
検出したおもな遺構は宮外郭の門基壇、それにつらなる南面大垣、二条大路とその南北両側溝、宮内の東西道路等である。南面東門は推定第二次朝堂院地区の正南に位置する門であるが、門基壇SB九五〇〇の掘込み地業の規模（東西二八・九m、南北一四m）から、ほぼ平城宮西面中門（佐伯門）と同規模であり、朱雀門に準ずるような大きな構造をもつものではないことが判明した。

木簡は計一四六点のすべてが二条大路北側溝SD一二五〇から出土している。二条大路北側溝は他の遺構とともに三時期に大別できる。A期には幅四・二m、深さ〇・九mの素掘りの東西溝であり、一部に護岸のための杭が残っていた。B期には門基壇SB九五〇〇の掘込み地業が行なわれるのにともない、門正面の三二m幅の部分にのみ、人頭大の石を五段積みあげた護岸を両岸に施している。そしてC期になると、この護岸部分は堆積土を残したまま完全に埋めたてられ、SD一二五〇は門の東・西端で止まる浅い素掘りの二つの溝SD九四五〇・九四五二に分断されてしまうのである。木簡はこのうちB期までの堆積土中から出土し、その上層（暗灰粘土）から五六点、下層（暗灰砂）から八〇点の出土を確認している。なお紀年木簡その他の遺物から、A期は和銅の造営時、B期は聖武天皇



第１図　平城宮木簡出土地点図

既発掘地
1980年度発掘地
木簡出土地
1980年度木簡出土地



第２図　平城京木簡出土地点図

○木簡出土地
▼1980年度木簡出土地

即位をめざした養老五年（七二一）頃からの造営、C期は天平宝字の改作時の造営以降という年代比定を考えている。

SD一二五〇から木簡に伴出した遺物で特徴的なのは木製の人形と墨書土器である。人形は門の前面を中心に二〇七点にのぼる大量の出土をみ、大きさ・様式にも多種類のものがみられた。『法曹類林』に引く式部文に六月・十二月晦日の大祓は「於二大伴壬生二門間大路一、各有二常儀一」とあるので、大祓の儀式と今回出土の人形が結びつく可能性があろう。また墨書土器には「兵部」「兵部厨」「兵厨」「民厨」「三番」などの記載がある。「造兵司移」(5)や考課関係(6)の木簡とあわせ、さらに平安宮城図の古図で兵部省・式部省・民部厨が宮内南辺に位置することなどから、平城宮においても、南面東門付近に兵部省・兵部厨・式部省・民部厨等の官司の配置を推測できるものと思われる。

二　右京三条一坊三条大路（第一二三―二次）

調査地は平城京右京三条一坊十二・十三坪の南端にあたる。調査により、三条大路とその北側溝を検出した。三条大路北側溝は四度に及ぶ改修の跡がみとめられ、出土土器から土器編年の平城宮Ⅶ期（平安時代初頭）以降に廃絶したことを知りえた。木簡はこの三条大路北側溝中から一点出土したが、墨痕の判読は困難である。

三　法華寺西南部（第一二三―四次）

調査地は法華寺旧境内の西南部分にあり、阿弥陀浄土院跡の北西端にあたる。

検出した遺構は掘立柱塀二条、溝、園池等である。掘立柱塀は東西に走る一条が後にやや北の位置につくりかえられている。この東西塀の南側すぐには幅二・七m、深さ〇・五mの素掘りの東西溝があり、一方北側には五mをおいて南岸をみせる園池を検出した。この池の全容は調査区が狭いため不明である。東西塀や東西溝は阿弥陀浄土院の北を画する施設と考えられ、東西溝の南はちょうど坪境小路の位置に相当している。

木簡は右の東西溝から木製品・土器・軒瓦とともに計四四点が出土し、また園池の埋土からも一点が出土した。出土した土器類は溝・池両遺構ともに奈良時代後半のもので占められている。

四　平城京西市跡（第一次）

本調査はマンション建設計画にともなう事前調査であり、調査地は右京八条二坊五・六・十一・十二坪に比定される平城京西市の西南の坪十二坪にあたる。第一次の調査では同坪内の五ヶ所に発掘区を設定した。

検出したおもな遺構は西市の南を限る八条大路の北側溝、西市内の十二坪を南北に二等分する掘立柱東西塀、小規模な掘立柱建物三棟などである。木簡は削屑三点を含む計五点が、幅四m、深さ〇・五mの八条大路北側溝（上層）から出土したが、いずれも判読困難な墨痕をとどめるのみであった。同じ溝からは銅製帯金具・和同開

珎一・神功開宝二・銅製鋲等が出土している。なお、第二次・第三次の調査では木簡の出土をみなかった。

五　左京二条二坊坊間大路（第一二三―二六次）

調査地は左京二条二坊五坪の東北隅にあり、第四四・六八次調査で確認されている東二坊坊間大路西側溝の南延長線上にあたる。

検出した遺構は東二坊坊間大路とその西側溝ＳＤ五八七〇、同側溝廃絶後の溝、柱穴、土壙等である。

木簡は総計一八点が東二坊坊間大路西側溝ＳＤ五八七〇の下層から出土した。北から南へ流れるＳＤ五八七〇は幅二・五ｍ、深さ一ｍ弱で、西岸には肩に段がつけられ、一部護岸用のしがらみを設けていた。同溝出土の遺物には、木簡の他、櫛・人形・曲物・独楽型木製品等の木製品、和同開珎二点・帯金具・飾金具や、奈良時代中期から後期にかけての土師器・須恵器・転用硯、そして緑釉平瓦を含む瓦、一〇点を越える塼などがあった。「和」「下」等の墨書土器や「老」の刻印をもつ文字瓦もこの中に含まれている。なお溝の下層から出土した土器は、土器編年の平城宮Ⅲ期（八世紀中葉）のものが中心であった。ＳＤ五八七〇の豊富な遺物からすると、溝の西側には重要な遺構の存在が予想される。

六　九条大路（第一二五次）

本調査は平城京の九条大路を踏襲する位置に計画された県道城廻り線の工事に関連した事前調査である。東西に狭長な用地の中で、九条大路沿いの右京九条一坊四・五・十二坪の南端部に四ヶ所の発掘区を設定し、条坊遺構の検出をめざした。

検出したおもな遺構は、九条大路、同北側溝、それに接続する西一坊坊間大路、同西側溝、右京九条一坊四・五坪坪境小路、同側溝、右京九条一坊の南辺築地の雨落溝等である。

木簡はそのうち九条大路北側溝から七点、同側溝と右京九条一坊五坪東南端の南辺築地南雨落溝との間で検出した井戸から一点の合計八点が出土した。

九条大路北側溝は、幅二・五ｍ、深さ〇・八ｍ以上で北岸をしがらみで護岸したＡ期、侵蝕により溝幅が広がり応急措置を施したＢ期、Ｂ期に下層（灰色粘土）が堆積した後溝の幅を狭めて上層（青灰色砂）が堆積したＣ期、の三期に分けることができる。出土土器の型式から、右の三期は各々平城京造営時、奈良時代中期、同後期～平安時代初頭にあたるものと考えられる。この溝からの木簡出土地点は、右京九条一坊四・五坪坪境付近の下層（五点）と、五坪西南隅（二点）の二ヶ所である。また井戸出土の木簡には奈良時代初期の土器が共伴している。

8　木簡の釈文・内容

一　平城宮南面東門（壬生門）

二条大路北側溝

(1)・「大膳職宮人縣加利祿絁二匹布八端」

・「　六月四日□□□〔石カ〕」　263×41×3　011

(2)・「内侍高田丹比門出八日多□〔治カ〕×
・「□□□□□□□□□□□□□□□□□×　(194)×(23)×3　081

(3)×□奴大魚之自家尓浪人集令住事問給申久□□□□×　(223)×22×3　081

(4)×伴門□〔籍カ〕×　(67)×(18)×3　081

(5)・「造兵司移衛門府大楯并桙事以前等物修理已訖宜　」
・「承状知以今日令運仍具状以移
天平三年十二月廿日従七位上行大令史葛井連□足『』」　283×39×2　011

(6)「右五人進二階正八位下
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃　(162)×25×6　015

(7)・「龜四年四月
・「　寶□　(94)×(10)×4　081

(8)・「　天平四年
・「　四年　(149)×22×3　051

(9)・「天平六年
・「□□坊　(78)×15×3　051

(10)・×□□□〔野掾カ〕従七位下大伴□×
・×□〔七カ〕位下石川東人　(168)×(9)×7　081

(11)「V但馬國養父郡賀母郷白米五斗」　176×30×3　032

(12)「備前國上道郡安度郷立原里大マ□□足三斗同得□三斗并六斗」　234×22×4　051

(13)「V伊豆国加茂郡□〔色カ〕日郷矢田マ多米志調□×　(166)×24×5　039

(14)「V益珠郡馬道郷石邊玉足　(132)×17×3　033

(15)「球割鮑六斤　」　194×20×3　051

(2)にみえる丹比門は出土地の南面東門（壬生門）とは逆の北面東門にあたる。(3)については最初の□の残画が「工」に似ることなどから、神野清一氏は謙語としての「主奴」説を出されている。(5)・(6)は各々南面東門付近に兵部省・式部省の存在を推定する一つの根拠となるものである。(13)の貢進荷札の郷名は今日の石廊にあたる可能性があり、平城宮木簡四三八号（『平城宮木簡一』）の「□日郷」も

同じとなるかもしれない。

三　法華寺西南部

東西溝

(1)「狛首乙山謹解申×　(122)×(14)×3　081

(2)・×□□十二箇月利本□貳拾□□□×
・　□□　(304)×(17)×7　081

(3)「□長〔紀ヵ〕　倭　春米
　　田口　薗　(114)×(21)×2　081

(4)・×□提□二房□三房□□房□□五葉□日□十□二□□葉□□〔入ヵ〕×
・×　□□□□　□　□　×　(171)×(19)×2　081

(5)・「兵衛狛弟山乙乙乙乙」
・「　□」　123×(16)×3　081

(1)(5)の兵衛狛乙山は同一人物であろう。(2)は出挙・借銭関係か。(4)は法華寺ないし阿弥陀浄土院の尼房との関連が注目される。

五　左京二条二坊坊間大路

東二坊坊間大路西側溝

(1)・「伊勢國安濃郡長屋郷甲可石前調錢壹貫」
・「　神龜四年十月　」　148×(18)×3　011

(2)・×□□□□□〔昨夜ヵ〕今朝□×
・×□萬里□〔誰ヵ〕為□×　(149)×23×3　081

(1)は調銭荷札木簡（計四例）の最古の例となるもので、上端に小孔が穿たれている。「国＋郡＋郷＋人名＋調銭一貫」の書式は、調銭が郡単位にまとめて貢納されたと考えられてきた（『平城宮木簡二解説』八九頁）こととの関連で問題となろう。(2)は一九八一年度の平城宮第一二九次調査で出土した木簡のうちの五言絶句かと思われる「昨夜□□急今□□　飛故京千万里誰為送□□〔寒ヵ〕」（『平城宮跡第一二九次発掘調査現地説明会資料』）にきわめて似ている。

六　九条大路

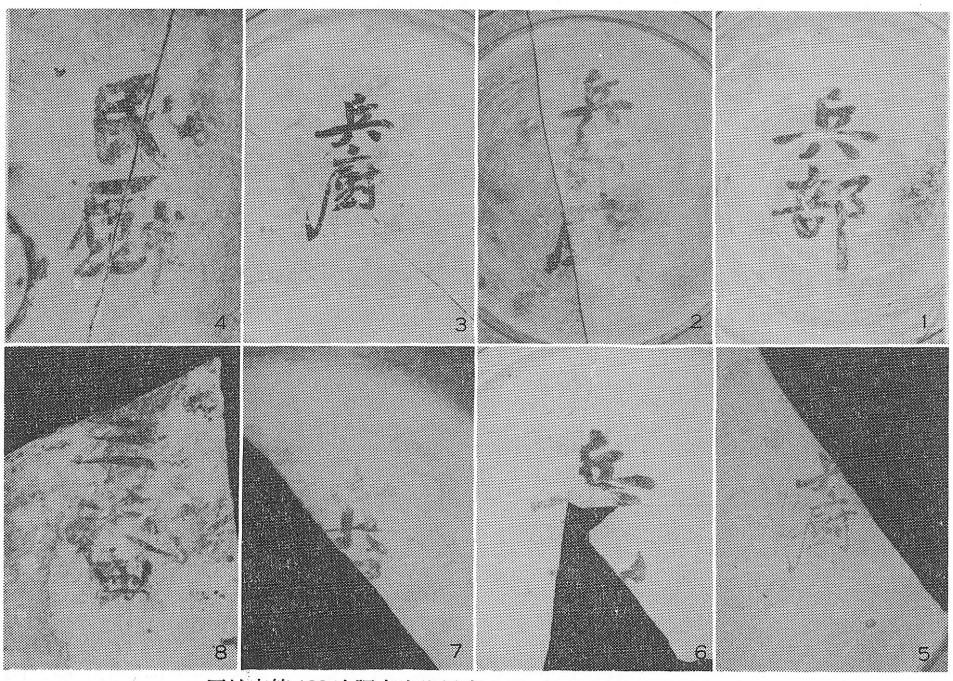
九条大路北側溝

・×□□道在道行×
　□
・×為□〔約ヵ〕□□×　(163)×38×6　081

9　関係文献

奈良国立文化財研究所　『平城宮発掘調査出土木簡概報』十四　一九八一年
同　『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』　一九八一年
同　『平城京九条大路――県道城廻り線予定地発掘調査概報Ⅰ――』　一九八一年
奈良県文化財保存対策連絡会他　『平城京西市跡を保存するために』　一九八一年
岡田英男　「昭和五十五年度平城宮跡の発掘調査」（『奈良県観光』二九六号）　一九八一年
上原真人　「平城宮の発掘調査」（同右）　一九八一年
山岸常人　「平城京の調査」（同右）　一九八一年
神野清一　「平城宮木簡にみえる□奴大魚について」（『続日本紀研究』二一五号）　一九八一年

（佐藤　信）



平城宮第122次調査出土墨書土器（1. 兵部　2. 兵部厨　3. 兵厨　4. 民厨　5. 兵厨　6. 兵□　7. 兵□　8. 三番）